

詩集のタイトル『月のピラミッド』はメキシコのテオティワカン遺跡の北の端に今も建つピラミッドの名前に由来します。そのタイトルが示す通り、この詩集は日本の記紀神話とメキシコ神話を繋ぎ、こころの起源を求めて地球を巡る冒険の旅へと読者を誘います。そして旅はいつしか未来へと向かうのです。

（誌面サンプル）

1. 作者の想い

私はほとんどの時間は詩を書くのをさぼり、気がむけば書くといったことを長年続けてきた。そんな私を毎日集中して詩を書く気にさせたのはいったい何だったのだろう。

ひとつのきっかけがあった。前作の『フンボルトペンギンの決意』（2020年4月）を出した後のことだ。まだ70しか詩を書いていないことが分かったのである。少な過ぎる。せめてあと30書いて100にしなければ、死んでも死にきれない。心を入れ替えて詩を書こう。

そして新型コロナである。ほとんど家に閉じこもったままの生活が続いた。かくして、詩を書いては直し、書いては直しという毎日が始まった。そして1年ちょっとで詩を30書くことができた。私にとっては驚異のハイペースである。

あと何年生きられるか分からないけれども、行けるところまで行ってみようと思う。

（『あとがき』より編集）

2. 詩の一部紹介

さよならが
詰まった街の
昼と夜を
夕陽の紐で綴じ
石の表紙と
木の扉を付けて
無理やり
装丁した
叱られた子供のような
あとがきを
書いた

演じ損ねた場面を
かき集めて詰め込んだ
リュックを背負い
満員電車で通勤する
半透明な顔の向こうで
都市の枠組が
繰り返し運搬されてゆく
君が少女だった時
（もちろん少年だった時でもよい）
よく動く白目が
空のように青かったはずだ

（『装丁』全文）

右目からこぼれた涙のなかには
月を読む神が
左目からこぼれた涙のなかには
天を照らす太陽の神が
鼻から垂れた鼻水のなかには

スサノオという神が
膝を抱えて入っていた
神々は誕生日を覚えていなかったの
いつまでも死ねなかった

ジャガーの宮殿に入り
月のピラミッドに登った
ピューマの壁画を見ながら
死者の大通りを歩き
太陽のピラミッドに登った
風の神が全ての神を殺した

右目から生まれた
月を読む神よ
左目から生まれた
天を照らす神よ
鼻水から生まれた
泣き叫ぶスサノオよ
自分の誕生日くらいは
覚えておいてくれないか

月のピラミッドの上で考えた
空を見上げても目がくらまないのに
足もとを見下ろすと目がくらむのは
何故か

ささやかな出発をしよう
ミルマスカラスが被っていたような
派手なマスクを買って帰ろう
プロレス好きの息子への土産に

(『月のピラミッド』抜粋)

脳のなかをいくら探しても
こころは見つからない

こころは
からだの奥の
海のような暗闇に浮かんでいる

君のこころと
私のこころは
何処がちがうのか
海よ
体の奥の海よ

幻の水路を
繋ぐことができたなら
君の海と私の海の水位が
等しくなることだって
あるだろう
たとえ
遠く離れていたとしても

(『こころ』抜粋)

失くした色を取り戻しに
地球の向こう側で新しい旅を始めたのになぜ
残っている色をふりしぼって
イグアスの滝に
虹をかけようとするのか
なぜまた夕陽になりに
ここに戻って来るのか太陽よ
風に頬を震わせながら
ぎしぎしと回っている地球よ
私は一匹の蟻として
地面を這いずり回っている

喜望峰の岩と風でできた丘で
葉書を赤い郵便ポストに放り込んだ
枯木灘で夕陽を見ている君に
届いただろうか
暗い目をした君よ
私の葉書を読んだら
折りたたんだ時刻表に
挟んでおいて欲しい
あしたからは
知らない世界を記憶することになるから

暗い目をした君よ
君が奪われたものは
最も君らしいものだ
悲しいという言葉は
最も悲しみから遠い
あるいは
こう言えばいいのかも知れない
私たちの世界を
明るさで隠すことはできない
と

夕陽が帰ってきたら
夕陽に向かって言え
虹の色はきのうより美しくなったかと
美しい空に向かって言え
私は私を始めると

(『夕陽に告げる歌』抜粋)